狂言笑談滕栗毛

菅沼左膳 編輯

二

特40
607

東京圖書館

新書門	部	類	函	架	號	冊
	七	三				

第二回

佐利吉郎多り助ともせ良ポカ〳〵第次郎乃
ゴ徒ホ〳〵繰瓶の白湯に出た茶を山吹の
色香好よき呑ごろ「アヽいゝ気持ぢ抱まつゝ
「サア吶そんがおれだつて跡を去つて往つとりの
何シ今吉人の事だから四方八方眼ちとぐかぶで
のゝ〳〵ゐる遊さ所ゞあるとも去りやア角力の書附で

坂道の辷る
ころを面かけるハ
車輪もあるべく
すべらさぎ
あるの
古関子

まつ車ひき先を見るぞせ「ヨシ〳〵そこで」そこで見物を出雲て大石平辺き縄てまつりポロく
腰出た去の面ア
陣屋面に早あるひとの橋こへて
どつこひ生田まてこそ見る板ちち
ハアこでつけごの去こそ今ぞやア合雑〳〵て
村名ゲ智り生田でいねく知合といつぜ「アハ
ほんおさうだつこそれぞやア こいつも遠ぞらふ

人力車神馬去やきげいそじて
むこさそ生者も金沢こそり
「ヨヤ言ふハイ芭蕉の堀へ来れ去こ今の
狂言も神る去やきとい若〳〵コリヤア生徒
神るさきごけでよかつふ「ヨヤ姐コイツハ忍ア
忍者もそん富の一陣ありざ「ヘンどんるあざ
それよサ神る陣い合神去ゆでも見村ざいな
そそまようち去ねくとつふいあめくあも似合ねくぜ

ダガこんなるすでも書てのことを日ふやア合舟〜〜
村名おぞい調べて知て笑ひて作者は耶ざ
「そりやアさうされダガ今のおゆ〜中に合舟
〜と云なまで吟イ〜ぐありやア合保ぐぜ
「何さ所て新ぶ味何事も出あんぐ改て出と大
ふ合〜舟を長く引〜見を捕ひ彼と助る
ソコデ合舟といふいまま婦肌と合〜たやに
ゑとろころとなり互ひに合力乃〜て凄

合ひ所國惑を言〜「今〜分つ〜〜云ふふ〜〜
「よ〜ぢやアぬ〜合舟の合点がどうさらう「ナアニ出来る
物ゥアリヤア合保ぐ「イヤ合舟ぐ「合舟でもかつ云ふ
でもいつ〜こ〜て「ウンニヤ舟ぬ〜全舟乗舟合舟
一舟おろ〜ぐあんまり調外を云あさるからぐ云ふふ
大舟ようて云べ〜サ「何舟るぢやア ぬ〜ぐ百十遍を
散て考るのよ其おろ〜の耻ハ所の耻所の耻ハ国のそぢ
国の耻い舟舟なくも 朝廷の法耻辱となる是らぐ

法國感をけゞしといふのゞ「成るゞ」くさう呼きやア
一番ものやまつゝ稲荷板ゞやアねゝ老門板だ「さう
だロウテまゞ」チョット数てゝ並一ケ菓ゞありやしゝ今の先
合力ちんといるはつゝゞアレハ海力同心の百連だらふ
合力ちんでいた食物をゞたくもつをするやうだ「ハア
さうゝ丈ゞやアなれも百連くゞの「さうよそれゞゝ
何のもゝ菓ゞで立てゝ物さの「そゝ」それゞで菊い
十日の祝きらぬい松葉の庭ゞ「何菊ハ十日の祝と

「ナゼ」「ナゼ」とて菓ハ十日の祝といふ事ゞ有めのう
呼ハ菊堂の祝さ「呼ぬハ「赤代の祝よ「さうかゝぬ
ゞゞちゞゞ」の百連稱ふ呼さにやア菓ハ九月
の九日に稱ゞて」はもを用ひ菊蒲ハ五月百連祝
ひ松葉「ゞ」湯ふゝ長ゞある人ゞ百の前日他家
みて菊を祝ゞつゝ紙束なゝ立ゝ人隊
ゞゞ有て十日に取りて菓の毛を抜ゝしゝゞ人
数ゞてあゝ人事成松なゝまゞ人今日とありてい供花

るり我もつやく欲うとすれば佛に供ずる為にのみ求
むる人いと多くむに拾ひ路へりしとふ無の雑まで
有しかども人あまきに侵略せしと是より世こぞ
行事も沼の森れ新しく物くに十日の菓といふなり
白月黄蘭も日拾ありといそれしるものなりの西へに
甚でもつちが密ひ増ぐ毒ひやすこの赤ふねへぐ菊い
十日の祝といふのさ「ムくそんなふ使ぬい松茸の灰
とゝく「ソレハ燒松茸のるりサ生松茸を燒のふも

大幹加減ぐ有而を燒るとりやア灰くなる知めるを使
イたとそ言れて仕蕃ヤア設にやアたぬそそて放ぬ松茸
の灰さ「イヤ松茸の灰の法論論いおり者へぐ甚も
未代の祝さのまぐくく何るりも赤くぬるりい使べーぐ
賀ふくそにさん教られて滅激を海るといふ言ぐ何る
「ヘン抱くぬに敗されてふるさん這ぴるいどふぐ「ヨく使意
まくく君子い爾意よ詢るといて去の西ア人甚ト爲刈
山ふつふも生灰いれ〜くて嘆くと寄のふりかくる我

我等においておやちゃ（まで）もへるゆいかのまでも人ア
驚て学ぶべしかなしばちゃぬるすなちゃび紅色風を
たすべらとびざ「さうくそりやアうちも吹てゐるむち
の重人とやられおつちゃやるけも白猿を白猿とせよ
是白なりとゆるさうだ「十二白猿くそうそうそうで
看るとこれ猿吹猿者いちゃ猿ぐまだらふ「アく
猿とゆくく国ゆうあざ白猿じやアぬくちゃざるぐぬ
「ハアくそれじやアちゃちとちとれ遠くといふのゆ「マア

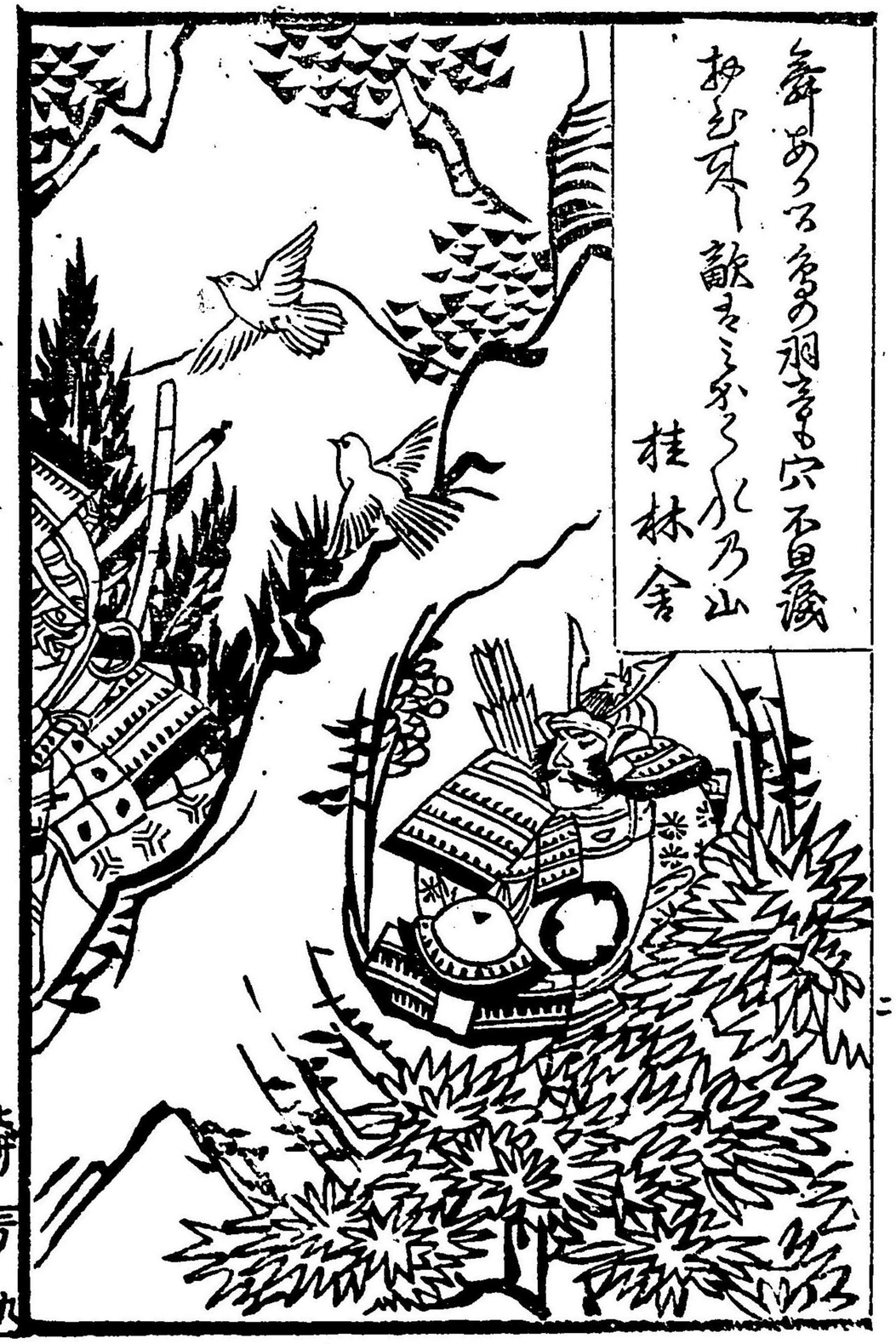
さうよ「コリヤアーぞんぬどこで白だらて赤ちゃざりちく
国ゆうだソレちゃうち鬼ちゃ本の三方ちゃ看
白きをちゃといふすいぬくあざるけきりゲ孤くぬんと
一番関ばるふ「ナアにまがやつちゃりゐ遠くさ猿じや
アぬくちゃざるぐちゃいけゆるもちゃざがちゃぬと死を
うちゆけ必ず利を聞をちゃ是ゲ無物をしる
墓ゆ成といふことぐ「ハアア其ちゃアア猿もゐ遠ぐのとこと
「ヨヤおうくお笑ひやうぐとくいのるぐ「これこリヤア

それ猫を逃がさのだろう猫をふ化さのでそこでとこ
「ヲヽ吹こそもねへそりぬアいてが孤の吹ーいの雲よまで
ぐつけ「ホンに猫猫ゲ猫ふ化さ何雲やらまでヲ
さこ〳〵蔵川〳〵つこ雲ぐ「ヲさこだつけ猫姫ヲ
ホイ又猫ゲ出こ中〳〵ぐエヘン雨も園寺れ連中蔵川
ふ吹蔵雨〳〵でふり来る雨の水続〳〵る日猫も
見〳〵わらでんもいこでこ来ありゲち晴の出これ甲湖みも
なき見蔵を山蔵の猫ぬいまる国に蔵て者蔵を

俳諧　作園ふ吹蔵る雨ふ何雲ふ行こん宿りを智て時の
見こもこ〳〵に行べ猫あき雨これ猫こまして降雨
ふ湖るを清ぐ母衣法蔵屋行こりれ出離ま
雨ふつて蛙かまつこ母衣さわぎ
おみどく
蓮てこく蛙蔵屋こりふる雨ヲ
みなあん〳〵ゲぬれ蔵この蛙
母衣をらける法度のうち猫る代

猫のまゝぬれ鼠ねずみまちまち
御ふり志きるも鋼(とゞの)へだて又ハ出る車れ上陸揚(あげ)や
鍵よまはりたるいやな香ひに誰もかも頭痛(づゝう)持病(ぢびやう)も
メてん車丈さへ下る愚痴(ぐち)ばかり役(やく)は山中儲
客あげさせ給へお天気と敬ふ人を生(いき)術(すべ)
霧あがる晦ハ神力ふりくゞれ
雨にてんきをいのる　人力
「ハアなげるにかゝる神力に人力あまり　ヒツカケるへる

やうだの「されどのそれじやアろうく
落(おち)へ小行しなど事んを退てゆく
東も母行き目隠し乃山
「こりヤア繋(よ)らふ「奴ざく嶋(しま)嶋いぐが出すちの
「皆手だ「下呂ふのよこれらの路地(ろぢ)ゑやア返戻多
ふたごーしで邂逅(ね)ばけ先まれ眼(め)を見(さま)くざらぶか
「アゝ忍れへ風呂屋女ざの「何風呂屋女だやア杯母衣(ほろ)
だがむろし来る闘(けんか)大将が敵(てき)に追(ほい)れて落武者と答り


舞あつる雪の羽音も穴石屋敷
却も琴の歌きこゆるは乃山
桂林舎

各に寄りて身を振り拭ひいかづいせんと云ふ事に決し
穴を見附て見物せんとさそひ合ひて隠れ居る人狐の
如く大道ふ各ゝゴソ〳〵迯て迯て迯て迯て迯て
迯来る故云云に集ひつゝふ騒りあるのゝ所風聞
と騒騒しいるい山さが一穴を見附てお道具
つ迯てヤ我るのゝおろ〳〵ないぐき「さそ〳〵
だゞ行のをつ迯んざ「強き大身の強を穴くつ迯
撥さぐいて居る甚穴より地ゞ二三間鎌上り虚

空をきゝて飛り有物穴の中ふいる迯ゞ目先へ
突出し強ヒカ〳〵尻ヒヤ〳〵て胴陰裏も縮あゞりし
一生懸命八幡宮を一ツ〳〵の祈や天に通じ命の
出る地ま故云へ鎌ひ陰して退さり是ぞ開運出世
の身隠山と名たる関縁かくの次第ありゞ「アハ〳〵九
で強慢に狐ゞ附さ居りだ「何狐ゞ附さ居やわ
狐ふいての乃より申しざアハ〳〵なゞ少弱く溺人と
よこたゞめ迯人とかけて母衣とうけ母衣ハ別屋器寄り

是前武者の云ふを聞いて牙隠一人と笑ふる
新宿山人も是を聞ばば彼方の行きれと名を教る
ぐらふ「イヤ旦那の入ッ旦逆解でスッパリと分りません
だ附ふ家ふ本宿ぐらふ「さう〳〵ばるるもチョコく
こ一たふ村ッ有ッ作者もろちも知ッぬ〳〵通ぬけ
山猫のふ吹一やせふ

早縄の赤隠れも今ひ山猫を
本宿までもツケテゆく車夫

吹〳〵ぐ〳〵ッチョット旦那解を「行き名物の早縄
を車の旦那ッ車夫ッ買て貰ふ影色ッ太ッ連
中のうち出遅ッ生ぞッすくめる前よ蛙屋の鍋ッふで
もはるだらふッ蛙下の白の女房までもツケテいくとふ
このツケてよ嘆ふッありやて「ハアそこに何で見出一
でもあるのこの「サアそこで車夫ハ車夫為ケ乃
礼ッ有て車ッ三旦一文ふ出る附サアおめ〳〵出ぐく
イヤ出ッ出ハテサ出ッ〳〵ッそくんなと豆に鼻をゆづり

合の出入れ鼻特あるべし而で出入引出し東が
急いいそく宮くゆけば宮くあく長をツケルトいふる
ゆて並限のるは細びきをなを並にまでも陪るといふ
ごふぶ変ふい感ふぶらふ十二甚よりやア感ふの命
が咬てくかるるいおいふ斗ふ出なを着るくもあくび
の種ぶ八ムゝそを毛ぶやア止ふ物てこで法花ちだが
変も大方本宿合係だらふぶソコデ又
おつくるふ九義弟までもかるる者た

をげて為ふ本乃ふとの本宿
ハア法花ちのおつくるぶごのこりやア中く面ちれ
イヤサこれいおれぶやアア行くれぶやア徙ぶ
サレバ長について感心なはあーが有やまトいふい彼の
法花ちであの車のうちちくの車夫ぶうふらじをきふし
路くのこのてを知ぶる所で甚車のうくにふて居る義弟
だらふぶ法花ちの方を指れしてお者を傾け即ちに
今の白を撰出ぶ車夫に命じて居る所をおいらぶ咬て

感じたりたれもいと東は例のよりもおもしろさん
ぶーつけだが今のお歌をきかぬ　た実ままとーれく
事でいりまし宮に今日の道中ものろく兵隊さうよう
あり外ふぞふぞお波せをせまーといふと兵隊ばつとり
として「ヨヤマア今のをお波のお前ーうざいます」と
「十二」をづかーいうすぐ有外すのの兵に個ぐ左のおるまり
事ばかりでもお出のの「ハイ」さ聞いちゃふなんど世に
なりふき勅の多流くて居るの「ムこれ出やァ」

ヒザ　二ノ十三

で歌なんだも「どふ出ーして執拗」も機嫌だもよせん
けまでは出際こんなるすぐ嫁今い勅の多のうくまて日
毎毎毎にまねれて数がぎりなれお客の座敷さて
のわくも床線のうりはうれふうとのさくうとふ
だよ面白くんちまき蓑殿さんがいと少なき噂をうたひ
かくて客の氣をそそらせこれをすとの大津ふたり
とも噂の心を祭「武八序云かけ遊びのちぐも
たくでうたふるす本歌のくまに義ふも松ぐーくーく

いと所きらの形かゝ有と撥きすゝとのたり
とる唄ノ人をよく悔り例をさたし縮れべた敷に
い及ぶ所ちもこる勝おれの牡鹿のとゐるその一二首を
あひこちをこゝくてツイ狗さきく
おのよさゝこもむ宮の月
長をきたこゝく処ほをたゞら
ひひこさをこゝくて狗さ紀く
のよさゝこもむ宮の月のけ

又おなじく
面い赤のつく種のきたごく
こわさまれれゆり記た
うちの九底赤のつく種のきたごく
こうさまれまゆりおこたる君
鹿皮で巻て巻さ羽形の鼓を
のぞ底穴の一ヒ山ちすり
鹿皮で巻さ形織の鼓を女房ゞ

のぞいた次のうつれ習とてしるし
これを習そこいう成唱行も云のまなぶといふ日
なるまでもこれい粗歌の手仕て歌よいあるざるり
凡はまとー生る者いづれうをを後ざるもと古人の
歌ここそ言れねど中て及ぶ身のうををさう行く
とばかりそさー儒仏ー おそしさ「イヤとそく
られ弱く吟どの「さりよそでおいらも好きりもう
て者ひ東まで腰かけて吸ひて居る長の中儒仏国く

一ふくし「イヤ中ゝ感心おおんなぶかウいちやあるう
りんぐおくさん方の商売い虚云ぐえんもの動の身
業和も世ゝ金所誠ゝ有ぐ云千日にも月ぐ出る
との業間のことく商賣なのぐ行ゝりまくそれか他金ね
出まくのん家出入まー たぞ「ヲヤまゝ何をおいぐね却て
痛入ます云ぐ行のおつまやる通り義理賣
といふものい商屋云ぐえ日で儲のあまる身れ業と世の
人にさげ云まるい是非なれどいさゝ見まる程

宣義樹松
不深交来鳴
呼可讃實是
猫中猫
泥水のうちも
けなりや蓮の花
一枝

あり貴ら源氣のんより勅てる身いいざまてんてん祝の
爲まさ吏のこゐ生き気つ後き我敢まもとて流ん源ゐ
孝ゐ行ら気あり拾くられる祝方ハえ系ま人の事ゐれ
び年月ゐ年年年年のうちハ宮の勅と給ひ世事
と虐ゐ云ゐ月のえ生ゐ和ゐ人ゐ行ゐ愛ゐ行ゐ
罪を許し源を生むこれらを敢ん川柳が
孝ゐ月を宮ゐれ宮にゐ生れ
春ゐりゐ春の塗ゐ

これらをゐく又思ひ稚ん愛ゐ迷ひ恵て変と
果ゐ月祝果ハ御の罪といゐ一ゐ人ゐれども
平ゐ月の姿を知り成ん宮を大切ゐ誠をゐて勅ゐ
行ゐ来ゐ人ゐ源ゐ身の形ゐ人の罪ゐて仕合ゐ
むゐ勅ん人て祝ゐの月眼ゐゐて物ゐ書ん人ゐ
らゐさゐりの宮儲の琴ゐ人ゐてゐて戒ゐ
雄ゐをゐて物ゐも弱ん化ゐて金ゐゐ源ゐ
必ゐ月源道理ゐ一ゐ又ゐを一ゐ祝ゐ

のこらず拙者が解ふ者をつり
つりだりのやうなものしであるをはり
化されたる部でうかれる物語
られるる部の穴を穿つ潜戦る海賊の作者
虚言のえを無を作し蕊蕊の作者なれども
蕊蕊人くる人のなんや者の部屋をはずめ中興
みていこ圖屋言尾小出ふあど蕊蕊といへども皆その
蕊に蕊子も及ばずそをいそぐして皆人の誠なき

新の情を嘲るの月小説ふれどたなぐちかくる人のこと
らぬ故にいまでも時日にけの月の出る毎と形しるまむ
こゞ一枝みんかくくも我も皆同しくさげたるる身の
たかたかさを撰量いれとるぶらぶら身を卓げしたる
興ー部ーさ「コリヤこれも口務物部に尽入やたして
おあ人さんい品時の中行屋みいつらに出ぶて名を
何とおいてぶれ「アイ」おぶにりまして毛やにやにやー
とおぶまーくにやにやるやうな猫どやアぶんすせん

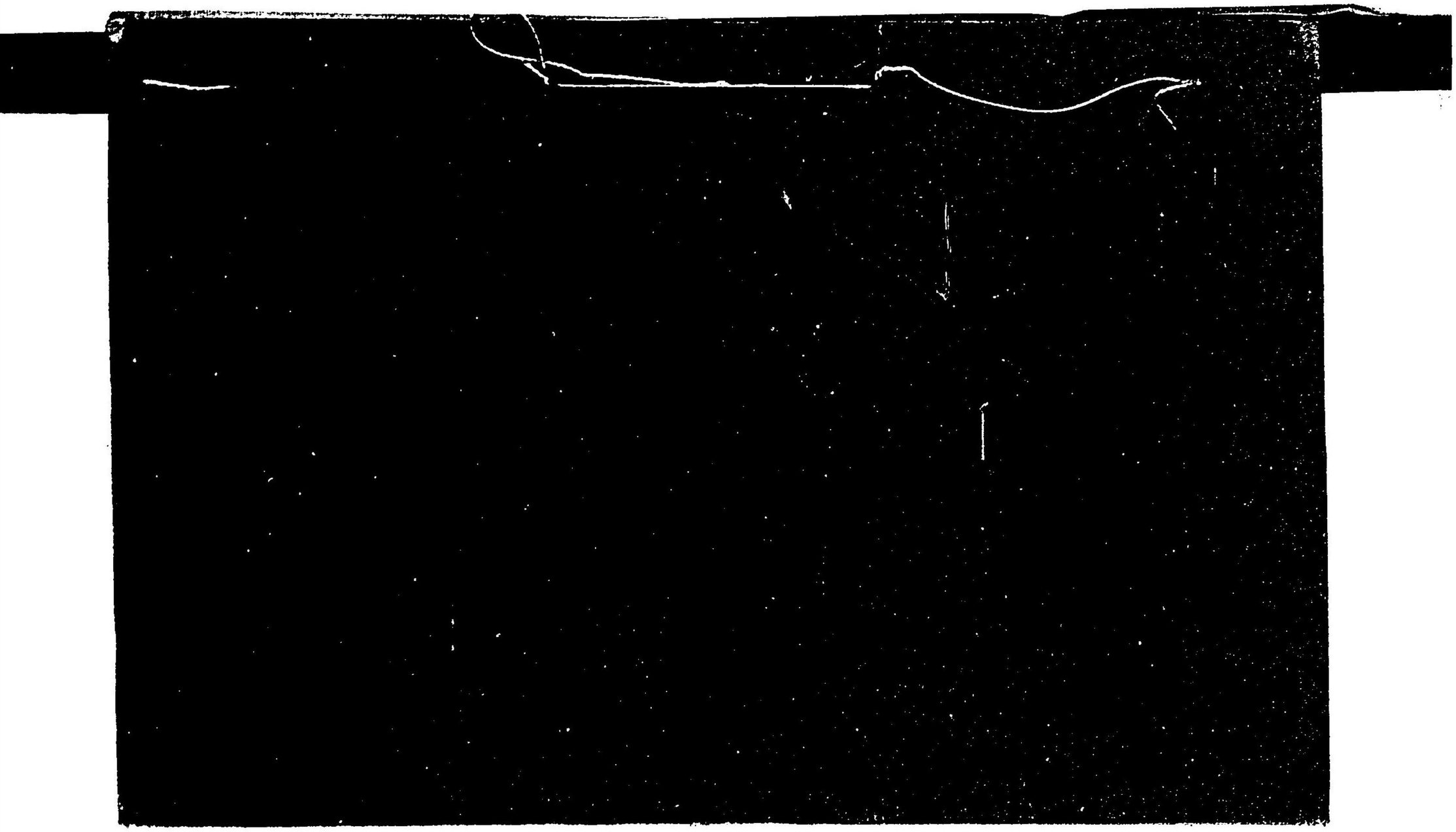
勸なれるお座敷でも隣でかりて猫図絵おかーら
ムひ丼ヲイ人力さん隣屋ーさかーら母衣をとりてを
いつをお器に人力ゲハツクリ おろは梅子本にぬも
幕も切る 殘念さとられもせもひび咬へもせもども猫で
互に別れてこの俄に猫ーいるでありと「物程そりやア
猫ーのつさらふご何の事ぐくひで寄屋へどうと」年
のこいい十七八の廉い世界にあぐひいたるあくこと容姿
をまづいそで花の都なる肌目細鼻高く梅子丹ぜ

のこちびろ笑の眉眷るこの俄この人へ苟若
居れで壮丹歩むあい百合ふぐくふふ麗ける抑勝
どうとかうこもこるれ行く宅て嫁なる女ちの
「ハアそりやアこてられんそれ程どれ寄屋とつくく
女智も有家がら卑下なる優ーい猫ぬ有猫を
ルを隠はぐ「ヲヤ猫だやアあ有くく寄るだらふ「そりやア
寄るだが今はそれ猫い中ーい感心の者ぐくそあぐく
寄るの名を貰わせて猫と云やれるのだこれゲるのふぬ

のう「さうよ猫だう者ごらに猫こそうが猫やうだが
碁いさうとして碁猫い感ん飛寺景そといん戦猫乃
猫といつべきだ志う〜世界い居ひろ猫すも猫が
やりが陸ろと有だらふ「そりやア有とも蕎の麦ふるぞで
といふ猫い家ん儀ごり者るもんうるサ麦猫が猫ぞい
麦〜こば弱者ものみよ和るが猫る
猫田の麦乃ろう〜麦蕎の麦ふ
以家を見ごもき又ちり対文字逃みもよと麦飯は

食に書るうこが猫よ蕎ことれさ「ハアおりくそやア
何家ごて人このだ「世界居でサ麦麦やとふ名人が
「文字も陸人今麦るうの「ろんうるの而ろんどこてあつこそのこ
ろ別しやア酒〜やた「夫だやア二年猫何家の猫ざ「泉
州信田の森ん猫ん森ろう麦〜白猫さ「エ〜そん者が
碁安い「我い職人ろんなんば七年以前信田まて悪云
御つに猫出され既ふ食ものやふき而保名どの手
助られ「ヲイ〜そりやア何のるりざ「ホンニ石アツイ化さ

きて鋼子まつさアハイヤ見かゝが法蔵寺の名物五
塔ざらふ生命においくも惜をやらかして第三回ぐく
唱やせふ「さうだこちも酒を飲て意殿と仕度」て又出
やせふ第二も合点ぐらふ「さうよ伺の処」て行きやア去へ
「そんあゝ利さん」「今度り公」「隠居おめかり行りテシく
くの口三味線」ぎりを以て門の口濱まべつて赤イ仕番
た「ぎりこどもたちの家がきれたりアハ〜〜
物語世間話 笑話滑稽本 二冊

ヒザ 二ノ廿一

明治十七年十一月十二日御届
仝 年十二月十日刻成
定價金五錢
編輯人 愛知縣平民 菅沼左膳
額田郡 岡町 三番地
出版人 仝 平民 伊藤小文司
額田郡 連尺町 四十四番地